

平成8年度

児童生徒の国際性の育成に関する研究

----- 国際理解教育の実践に向けて -----

川崎市総合教育センター 国際理解教育研究会議

児童生徒の国際性の育成に関する研究

— 国際理解教育の実践に向けて —

国際理解教育研究会議

林 英和¹ 吉澤寿一² 佐藤裕之³ 渡辺博文⁴
穂積眞一⁵ 甲斐 修⁶

— 要 約 —

国際化や個性化が叫ばれる今日、学校教育における国際理解教育の必要性・重要性は多くの人が認識している通りである。そこで、各学校において、国際理解教育の実践がより意識的・組織的・計画的になされるために、どのように取り組んでいったらよいかという課題にこたえるべく、具体的な実践の考え方や方法、あるいは児童生徒の変容事例を示したのが、本研究である。

まず、国際理解教育の実践への見通しがもてるようにするために、国際理解教育目標構造図を大きく3つのレベル（認識と情動と行動）に整理し、それに対応した実態調査票や国際性グラフを開発した。

次に、国際理解教育の実践をした時、子どもはどう変容するのかという評価の問題に、検証授業を通して取り組んだ。7年度は個々の授業について多面的に評価し、その授業単元での児童生徒の短期的な変容をとらえた。8年度は、1つのクラスを対象を絞り、約5ヶ月にわたってコミュニケーション能力の育成を意図した授業を継続的に行って、クラス全体や4人の抽出児童の中・長期的な変容を追究した。そして、国際理解教育の実践の効果を、国際性グラフや授業アンケートなどの分析から具体的に示した。また、意図的・継続的に実践することの大切さや、個に応じてその変容を総合的に見ていくことの重要性に改めて気付いた。

今後は、国際理解教育の授業単元を位置付けた年間指導計画作りが、大きな課題となろう。

キーワード：国際理解教育、目標構造図、国際性グラフ、コミュニケーション、評価、授業改善

目 次

はじめに	3	3. 平成7年度 検証授業の内容と考察	137
I 主題設定の理由	134	(1) 1単元の取り組みと生徒の変容事例	138
1. 何を問題としたか	134	(2) 課題学習の積み重ねと生徒の変容事例	138
2. どのような視点から検討するのか	134	(3) 継続的な取り組みと児童の変容事例	139
II 研究の方法	134	4. 平成8年度 検証授業の内容と考察	141
1. 研究の仮説	134	(1) 検証授業に取り組むにあたって	141
2. 研究の構想	134	コミュニケーション能力育成のための研究 構想図	142
III 研究の内容と考察	135	(2) 検証授業⑤・⑥・⑦の実際	143
1. より機能的な国際理解教育目標構造図	135	(3) 検証の方法	143
(1) 3つの国際性の柱とそのレベル	137	(4) 検証の結果と考察	144
(2) 国際性の具体的目標内容	137	IV まとめと今後の課題	148
2. 実態調査票の開発	137	(1) 実践への見通し	148
(1) 作成までの経過・ねらい	137	(2) 児童生徒の変容や国際理解教育の効果	148
(2) 実施の結果（国際性グラフの誕生）	137	おわりに	
(3) 国際性グラフの考察	137	・参考文献・指導助言者	

¹ 川崎市立川崎小学校教諭（主任研修員）

² 川崎市立小倉小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立南加瀬小学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立塚越中学校教諭（研修員）

⁵ 川崎市立菅生中学校教諭（研修員）

⁶ 川崎市総合教育センター研修指導主事

はじめに

国際化や個性化が叫ばれる今日、学校教育における国際理解教育の必要性・重要性については、多くの人が指摘する通りである。児童生徒に、自分たちの生活そのものが国際化されていることを意識させ、国際社会で求められる資質・能力を育てることは、大切な教育課題の一つである。

また、国際理解教育の目標は、各教科・領域の授業の中だけでなく、クロス・カリキュラムも含め、より柔軟で、かつ計画的・組織的な実践の中で達成されることが求められている。

そこで、国際理解教育の実践に向けて、各学校が見通しをもって取り組むための方法や、その教育効果を提示することにより、意欲・関心をもって行動できる児童生徒の育成に資するような研究を進めたいと考えた。

I 主題設定の理由

1. 何を問題としたか…先行研究の成果から

本市では、国際理解教育の研究委嘱校があり、組織的な研究が続けられている。また、本市小学校の国際教育研究会や中学校の教育研究会・国生徒教育部会の会員により、実践事例の蓄積や授業を通じた研究も進んで来ている。

また、ここ10年程積み重ねられて来た当センターの国際理解教育に関する先行研究により、国際理解教育の目標構造や内容一覧などが示され、それらが日常の学校教育活動とどのように結びつくかが明らかにされた。

しかしながら、前研究会議が平成6年9月に実施した「国際理解教育アンケート」(川崎市内全小・中学校対象)によると、「意識のある教員が個々の立場で実践している」というのが約半数で一番多く、「学校全体で意識している」と回答した学校は、5分の1にすぎなかった。川崎市においても、国際理解教育の実践は個々の研究の域を出られず、学校全体の組織的・計画的な取り組みはまだまだ弱いと言わざるを得ない。

2. どのような視点から検討するか

上記のアンケートで見られた「他の指導に追われて時間が無い」(小・中合わせて46校)「国際理解教育についてよくわからない」(同38校)などの声にこたえるためには、次のよう視点からの検討が必要と考える。

○国際理解教育の目標から現実の児童生徒を見ようとしても、その実態をつかむよりどころがない。また、何かに視点をあてて実践しようと考えた時、国際理解教育の目標がいま一つつかみにくい。

→そこで、目標構造図をできる限りわかりやすい形にし、

それに対応した実態調査票を作成して、児童生徒のプロフィールを把握できれば、実践への見通しが得られるのではないか。

○国際理解教育を実践した時、児童生徒はどう変わるのか、その具体的な効果ははっきりとは見えない。

→そこで、授業実践を通して児童生徒の変容を探るといふ、評価の問題に取り組んでいくことで、各学校の国際理解教育実践への意欲を高めていけるのではないか。

以上により、研究のねらいを次のように定めた。

研究のねらい

- ・国際理解教育目標構造図を検討し、それに対応した実態調査票を開発する。
- ・実態調査票の活用により、その結果を国際性グラフに表し、実践の方向性を探る。
- ・授業実践を意図的・継続的に積み重ね、目標との関連で児童生徒の変容を具体的にとらえる(評価する)。また、その方法を探る。
- ・国際理解教育の題材を開発したり授業の方法を工夫したりして、それらをデータベース化する。そして、各学校が日常的に活用できるようにする。

II 研究の方法

1. 研究の仮説

これまで述べてきたように、本市では国際理解教育の理念が確立され、多くの授業実践が積み重ねられて来た。そして、前研究会議により、学校教育への位置付けや題材作成の手順などが具体的に示された。しかし、国際理解教育の目標がどの程度児童生徒に浸透し、どう児童生徒が変容したか、あるいは、どのような問題点が生じたかという、実践と一体であるところの評価の研究については、十分深められていなかった。

そこで、国際理解教育の実践の広がりをめざして次のような仮説を設定した。

- ①国際理解教育の目標構造図に対応した実態調査票や国際性グラフを開発することにより、国際理解教育の実践への見通しがもてるだろう。
- ②国際理解教育の目標を意識した授業を意図的・継続的に積み重ねることによって、児童生徒の変容やその効果を具体的に示すことができるだろう。

2. 研究の構想

上記の仮説のもとに、次のような3つの柱で研究を進めることにした。

(1) 国際理解教育目標構造図の検討

目標を、「認識・理解」「情動・価値観」「行動」の3つの面から検討し、整理する。

(2) 実態調査票の開発と分析

① 平成7年度

先行研究を参考にして、目標構造図と対応した実態調査票を開発し、4校（研修員が所属）で実施する。

◆調査期間 平成8年1月16日～23日

◆調査対象 小学校 4年 2クラス 60名
6年 2クラス 65名
中学校 2年 4クラス 140名

それらを集計し、子どもの国際性の実態を「認識・理解」「情動・価値観」「行動」の3つの視点から国際性グラフ（レーダチャート形式）で表現し、分析する。

② 平成8年度

分析の結果から、意図的・継続的に実践する目標をしばらくこむ。また、調査項目に一部改良を加え、多くの学校で活用してもらうようにする。

(3) 国際理解教育の検証授業とその分析

① 平成7年度 検証授業の取り組みの概略

個々の授業について、多面的に授業評価した。

- [検証授業①] A中学校 第2学年美術科 7月
「[エコマーク]つくろう」
(調査研究型、発表・表現型)
- [検証授業②] B小学校 第6学年社会科 9月
「朝鮮通信使がやってきた」
(事象・問題発見型、T・T方式)
- [検証授業③] C中学校 第2学年数学科 10月
「What-if-notの考え方を
用いた課題学習」
(問題解決型、話し合い・討論型)
- [検証授業④] B小学校 第6学年社会科 1月
「平和な日本をめざして」
(調査研究型、発表・表現型、
5人の教師によるT・T方式)

そして、ねらいとの関連から見た児童生徒のやや短期的変容をとらえるために、次のような方法を取り入れた。

- ア、事前・事後アンケートや感想から分析する。
- イ、ビデオ記録や授業記録から分析する。
- ウ、検証授業クラスともう1つのクラス（同一学校の同学年）の実態調査から、比較・分析する。
- エ、B小学校の6年生の児童については、その変容の様子をアンケートや表現作品から探る。

② 平成8年度 検証授業の取り組みの概略

検証授業クラスを1つ（D小学校5年生）に絞り、5月から9月の約5ヶ月にわたって、コミュニケーション能力の育成を意図した次のような授業を継続的に行った。

- [検証授業⑤] 5月
図工科「大きなお面をみんなで作ろう」
(体験学習型、発表・表現型)
- [検証授業⑥] 7月
算数科「図形のしきつめ」
(問題解決型、発表・表現型)
- [検証授業⑦] 9月
国語科「みんなで地球のことを考えよう」
(事象・問題発見型、話し合い・討論型)

そして、児童の中長期的な変容を具体的にとらえるために、大きく次の3つの方法を用いた。

- ア、授業の目標や活動内容にそったアンケートを授業後に行い、一覧表に整理して分析する。
- イ、抽出児童4人を決め、言動・表情などを詳しく記録して分析する。ア、との関連も見る。
- ウ、5月と9月に実態調査を行い、抽出児童や学級全体の児童の国際性グラフをそれぞれ描いて、それらの変化と3回にわたる授業との関連を調べる。

Ⅲ 研究の内容と考察

1. より機能的な国際理解教育目標構造図

「国際理解教育ではどんな児童生徒の育成をめざしているのか」「児童生徒に育みたい国際性は何か」という基本的理念を端的に表したのが、目標構造図である。

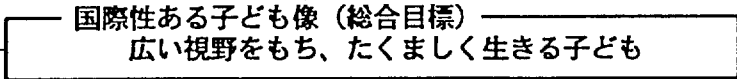
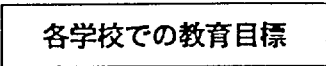
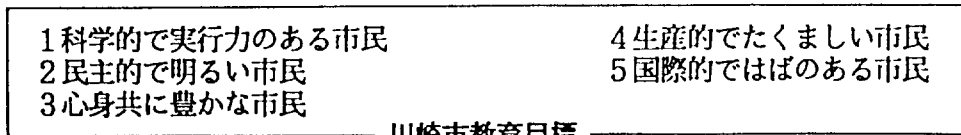
従って、次のような観点が必要であると考える。

- ・目標が、明確でわかりやすいこと。
- ・国際理解教育の実践を進める上での、拠り所となること。
- ・目標にそって児童生徒の実態や変容をとらえる手がかりになること。
- ・目標の意図することがイメージしやすいこと。

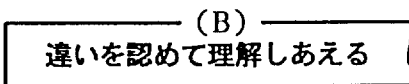
そこで、先年度までの研究会議で積み上げられ明らかにされてきた国際理解教育目標構造図の検討を重ねた。その結果、児童生徒に育みたい国際性を、総合目標と重複しない形で3つの柱A・B・Cに整理統合し、最終的には、よりバランスを意識した次のような目標構造図を作成した。

<次頁参照>

国際理解教育目標構造図

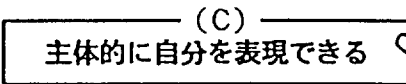


<日本人として自覚を持ち、平和的な方法と世界的・多面的な視野で
自ら判断し行動する>



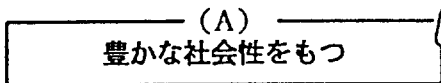
(認識・理解レベル)

- B-1 自国理解**
- ・日本文化、歴史、習慣、言語等について認識・理解する。
- B-2 異文化理解**
- ・ものの見方や考え方、行動様式の多様性について認識・理解する。
 - ・地方文化、外国文化、歴史、習慣、言語等について認識・理解する。
- B-3 相互依存関係理解**
- ・資源、国際的制度、法律、情報などの共有の状態や、公害、環境問題などの共通の課題を認識・理解する。



(行動レベル)

- C-1 思考力・判断力**
- ・その場の状況に応じて自分の考えを持ったり、自分の判断で行動したりする。
- C-2 自己表現力・行動力**
- ・自分の考えを様々な方法ではっきりと表現したり、自分の考えで行動したりする。
 - ・身近な環境問題や地域活動等に関心をもち、改善したり参加したりする。
- C-3 コミュニケーション能力**
- ・言葉や身体表現などで自分の考えや意志を相手に正しく伝えたり、相手の考えや意志を正しく受け止めたりする。



(情動・価値観レベル)

- A-1 協力・協調の重要性**
- ・個性豊かな集団での多様な行動を受け入れようとする。
 - ・体験を通して、様々な人や物とかわる喜びを味わう。
- A-2 人権・生命の尊重**
- ・他の人の考え、やり方、ものの見方・感じ方を理解し、尊重しようとする。
 - ・民族や人種の違いを越え、人間や生命の尊さに気付く。
- A-3 平和・友好の態度 及び 環境への関心**
- ・すべての人々が安全で平和な社会をつくらうとする。
 - ・身近な問題から、地球規模の環境問題に興味・関心を持つ。

<川崎市総合教育センター 平成7・8年度国際理解教育研究会議作成>

(1) 3つの国際性の柱とそのレベル

① 柱A 豊かな社会性をもつ…心

これは国際性の基盤になる情動・価値観レベルのもので、日常的な個と集団とのかかわりの中で徐々に育っていくものと考えられる。したがって、これが身についているかどうかを評価するのは、3つの柱の中では最も難しいと思われる。

② 柱B 違いを認めて理解しあえる…頭

認識・理解レベルのめざしたい国際性として、位置づけた。相互依存関係理解という内容を含んでいるので、「しあえる」という表現にしたが、ここではあくまで認識・理解レベルでとらえることにする。

③ 柱C 主体的に自分を表現できる…手足

これは文字通り自分を外に表現するという、行動レベルでの育みたい国際性である。

※なお、これら3つの国際性は互いに作用し合い、また、部分的に重なり合って高まっていくものと考えている。

(2) 国際性の具体的目標内容

上記のABCのそれぞれの柱ごとに、さらにその中核となる目標（B-1、C-3など）を3つずつ設定し、短い用語でその内容を表した。（以下、B-1等の記号を本論中で使うが、P136の目標構造図を見返すようにしてほしい。）また、印に続く文章は国際理解教育目標を表しており、その中に具体的な教育内容がキーワードの形で取り入れられている。例えば、環境問題に関しては、A-3にも、B-3にも、C-2にも位置付けている。さらに、以上をより具体化した国際理解教育・教育目標一覧も作成した。

2. 実態調査票の開発

(1) 作成までの経過・ねらい

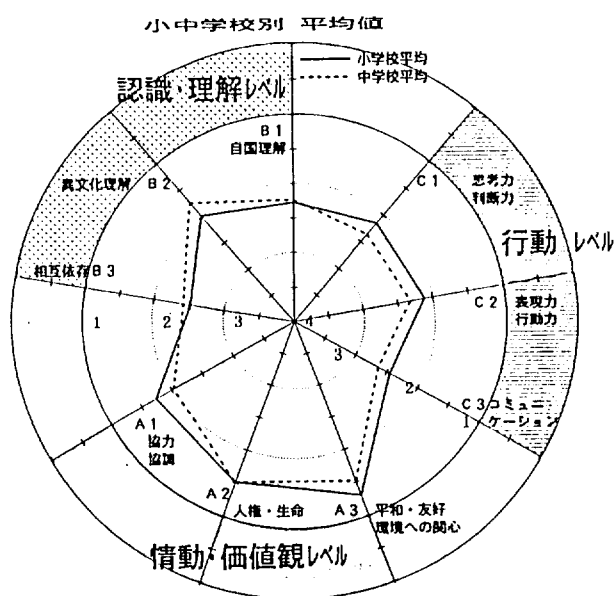
本研究会議のねらいにそった研究を進めていく過程で、児童生徒の全体的な実態を、目標構造図と対応してつかめる調査票が開発できないのかと、話題になった。

中・長期の変容をつかむ上でも、また、どういう国際理解教育の目標に力を入れて実践すべきかという見通しをもつ上でも、不可欠である。特に、これから初めて国際理解教育に取り組もうとする場合にも、有効となろう。

そこで、P148に掲載した参考文献をヒントにして、実態調査票調査項目の第1次案を作成した。

(2) 実施の結果（国際性グラフの誕生）

先に述べたように、小学生125名、中学生140名を対象にして、予備的な調査を実施した。それらを集計して、各中核目標別に平均値を出した結果、次のようなグラフ（以下、国際性グラフと呼ぶ）が得られた。



グラフの中心に4（ぜんぜん～ない）をとり、3（あまり～ない）・2（少し～いる）・1（よく～いる）と、外に行くにしたがって、望ましい回答が位置するようにグラフを描いた。さらに、国際理解教育目標構造図と対応する位置に中核目標（B-1、C-1など）が来るよう、グラフを設定した。全体のバランスや大きさが一目でわかるよう意図したわけである。

(3) 国際性グラフの考察

小・中学校合わせてわずか265名という少ない数ではあったが、次のようなことが見えて来た。

◆大きく柱別に見たとき、柱B（違いを認めて理解しあえる）については、中学校の平均値の方が小学校に比べて高い。これは、発達段階による差と考えられる。

◆柱C（主体的に自分を表現できる）の行動面は、小学校の方の平均値が高い。小学生のもつよさを持続させていくという実践が大切であろう。

◆柱A（豊かな社会性をもつ）の値は、柱B・Cに比べて高い。0.5ポイント以上の差がある。しかし、これで短絡的に社会性が他に比して高いとは言い切れない面がある。調査項目自体も吟味の必要があり、2年目には若干設問を変えて、実態調査票の改善を図った。

◆9つの中核目標を見たとき、大きく平均値が落ちているのはB-3相互依存関係理解とC-3コミュニケーション能力である。そこで、2年目の研究では、後者のコミュニケーション能力の育成に焦点をあてて、実践的研究を進めることにした。

3. 平成7年度 検証授業の内容と考察

(1) 1単元の取り組みと、生徒の変容事例
 [A中学校における検証授業 (検証授業①)]
 第2学年 美術科「[エコマーク]をつくろう」

① 授業について

身近な環境問題とマーク・シンボルの制作活動とを結び付けて、自分らしいエコマークをつくったり互いに発表し合ったりする学習である。5時間扱いの第2時「アイデアスケッチとその発表」の場面を中心に検証した。

② 検証のねらいとアンケートによる分析

☆環境問題について考えを深め、意識することができたか。(B-3およびA-3と関連)

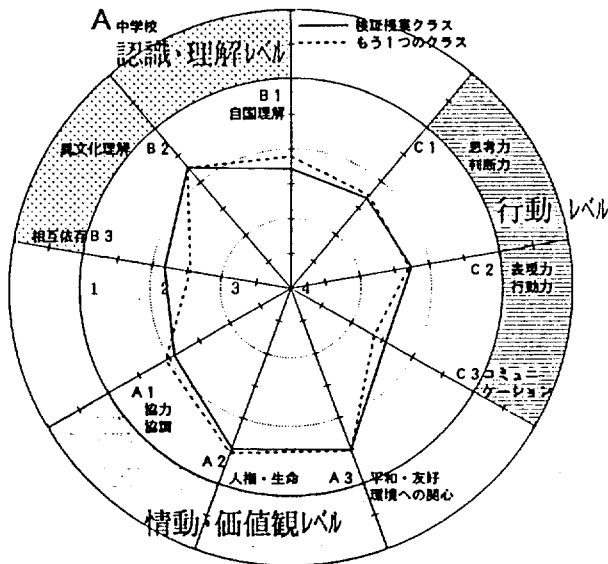
単元に入る前に「自分の生活と地球環境のつながり」を問う質問をしたところ、22.6%が「ほとんど感じていない」と回答していた。しかし、授業実践後の調査では、「これからの生活で意識していこう」とする者が96.7%に増えた。設問が食い違っているので、単純には言えないが、エコマークを表現した学習の成果が出たと言えよう。

☆自分のイメージを素直に表現できたか。(C-2)

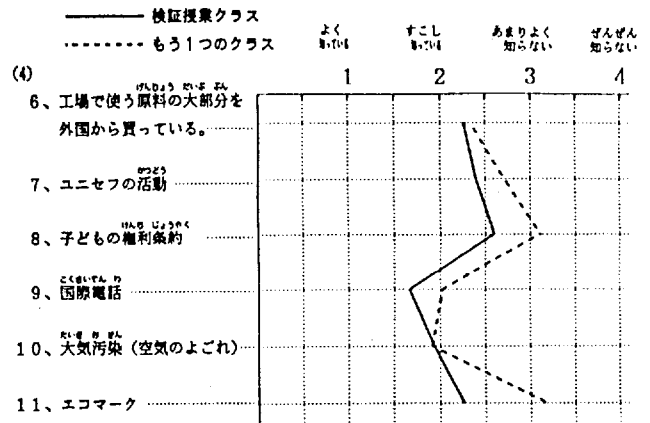
授業後、作品制作としての表現については、「できた」と答えるものが半数を上回った。環境問題について事前に調べた効果などが出たと思われる。一方、言葉による作品発表や意見発表などの表現力は、自信のなさや緊張、恥ずかしさなどの理由で、まだまだ不足している。

③ 実態調査票による分析

授業で目標とした「B-3相互依存関係理解」については大きな成果が見られた。 <下図参照>



そこで、この中核目標について、設問項目ごとに平均値の点を出し、それらを結んでグラフ化した。<下図>



エコマークについての認識度のクラス差が、他項目より圧倒的に大きい。認識・理解レベルでの定着度は、情動レベルや行動レベルに比べてかなりよいと言えよう。

(2) 課題学習の積み重ねと、生徒の変容事例
 [C中学校における検証授業 (検証授業③)]
 第2学年 数学科「マッチ棒で長方形をつくろう」

① 授業について

「What-if-not」(もしそうでなければ、それはどうなるのか?) の考え方を核にした課題学習である。自己探究活動を重視しながら、お互いの考えのよさや個性を認め合うことを意図した学習と言える。

6時間扱いの第5時にあたる「自己課題の探究と発表」の場面を中心に検証した。

② 生徒の感想や授業ビデオ記録による分析

☆自分の考えを分かりやすく表現できたか。(C-2)

☆他の考えの違いを認めて理解しあえたか。(C-3)

授業後の生徒の感想に、「意見が次々として出て、聞いているととても楽しかった。」「たくさんの考えがあって、すごいと思った。」「いろんな意見があって、いろんな発見もわかってとてもよかったです。」などが多く見られた。発表ボードを用いて順に5人の発表があり、それぞれについて、補足説明や反論などが活発に行われた。

しかし、一方で「今日は発表する人達の内容が高度すぎて、わかるのもあったけど、あまりわからなかった。」という声に代表されるように、聞き手が発表内容を理解していない部分のあったことが反省点として出された。

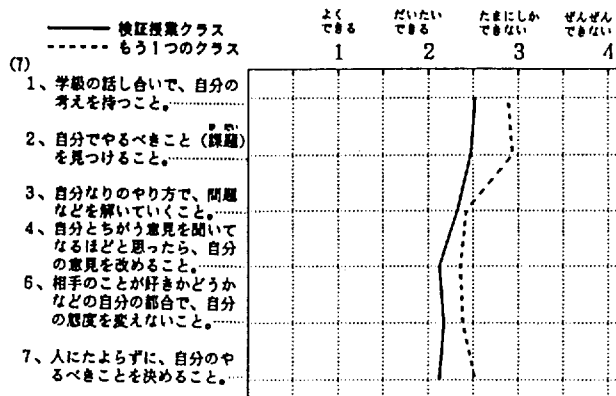
そして、発表者を上手に生かして、例えば発展性のある課題については、各自が考える時間を十分保障した上で討議すると、他の考えのよさや違いをより認め合えるのではないかと指摘がされた。

③ 実態調査票による分析

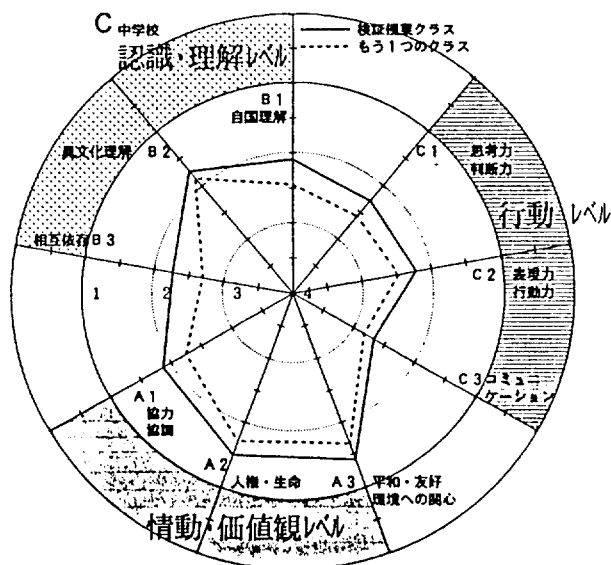
☆自分なりの課題を持ち、主体的に課題に取り組むことができたか。(C-1)

本時では検証できなかったので、実態調査票から「C-1 思考力・判断力」の項目について、詳しくグラフ化してみた。

各項目とも、同学年のもう1つのクラスより若干よい値である。この課題学習の方法が、3回にわたる積み重ねによって身に付いてきていると言える。<下図参照>



また、国際性グラフに表すと、どの中核目標についても、もう1つのクラスを少しずつ上回っている。課題学習の成果のみならず、教室環境の整備や朝の学活を利用した継続的なスピーチ活動などの取り組みの成果が出ていると思われる。<下図参照>



(3) 継続的な取り組みと、児童の変容事例
 [B小学校での2回の検証授業(検証授業②④)]
 第6学年 社会科
 「朝鮮通信使がやってきた」(9月)～
 「平和な社会をめざして」(1月)

① 取り組みのねらい・願い

「日本に近いアジアの国々・地域」は、社会科の歴史学習ではかなり登場して来るし、また、昨今のニュースで取り上げられることも多い。輸出入や人の往来を見ても、その結び付きはかなり大きいと言える。

にもかかわらず、東アジアの国々への子どもたちの関心・興味は意外に低い。

そこで、「東アジアの国々・地域への認識を高めたい！ 平和・友好の気持ちを育てたい！」(B-1・2およびA-3に関連)との願いで、継続的に国際理解教育の実践に取り組んで来た。

結論から述べると、このクラスの子どもたちの意識は、アンケート調査(9月と2月に同一のものを実施)の結果によれば、とても大きく変化した。

例えば、「あなたは、その国が好きですか?」という問いに対して、中国や韓国・北朝鮮については、9月には「どちらともいえない」というのが平均的な回答であったが、2月には「どちらかといえば好き」と「どちらともいえない」のちょうど中間に寄って来た。

また、「あなたはその国について、もっと知りたいですか?」という問いにたいして、中国・韓国については「どちらともいえない」から「できれば知りたい」の方へ、それらの中間点よりも近寄った。北朝鮮に至っては、約1項目分も変化して、ほとんどの児童が「できれば知りたい」と答え、強い関心・興味を示すに至った。

② 取り組みの経過及び関連する社会科の学習内容

- 1学期…「帰化人・渡来人」
「秀吉の朝鮮出兵」
- 2学期…◆事前アンケート調査実施
検証授業Ⅰ「朝鮮通信使がやってきた」
「植民地にされた朝鮮」
◆抽出児童5人へのインタビュー
「中国大陸への侵略」
☆新聞の切り抜き(ニュース)収集活動
- 3学期 ◆国際性実態調査
検証授業Ⅱ「平和な日本をめざして」
☆資料収集・調査活動、発表活動
◆事前アンケート調査と同様のものを実施

③ 検証授業Ⅰ（検証授業②）から

鎖国政策をとっていた江戸時代に、唯一李氏朝鮮とは正式な国交を結んでいたことを知らせ、当時の人々の朝鮮に対する思いや願いに気付かせると同時に、自分たちの東アジア観を見つめ直すことをねらった授業である。

本時はT・T方式で、T2が途中で朝鮮通信使の正使の姿で登場し、児童と問答する場面を設定した。児童は実際に朝鮮からの使者と対面しているような気持ちで活発に活動した。学習カードに、「朝鮮の話聞いて、なかなかいい国なんだなあと思いました」「朝鮮のことはあまり興味がなかったけど今日の話聞いてもっとよく調べてみたいと思った」などの記述が見られた。

④ 検証授業Ⅱ（検証授業④）から

歴史学習のまとめとして、問題意識をもって取り組んできた新聞の切り抜き収集活動を生かしながら、平和を実現するための課題を選び、グループ内で調査活動を進めながら新聞などにまとめていく学習である。

本時は研究会議のメンバー全員が相談者として参加し、それぞれ分担された分野について、そのグループの児童の調べ方や表現の仕方などの相談にのる方式をとった。例えば、日朝日韓関係については、34名中4名が選択し、先の授業で朝鮮通信使役をしたE教諭が担当した。事前に関係する人にインタビューしたり電話をかけたりした児童、また、中には新聞社に投稿してみたいという児童も出るなど、驚くほど行動的になってきた。

単元終了時点の児童の最終感想文をもとに、学級全体の活動の様子やめざす目標と児童の意識の関連を、次のような一覧表にして、分析してみた。〈次表参照〉

最終感想文の分析一覧表（部分）

分野	日朝・日韓（古沢）	歴史問題（林）	歴史問題
関心記事	朝鮮人に対する差別	植民地・大東亜戦争	ゴミ問題
学習課題	小倉の首領学校なぜ差別？	核は動物にどのような影響を及ぼすか？	ゴミと自然 これからのゴミは？
メンバー	4人	3人	2人
			藤の本古墳石室
			わたしたちの文化遺産を守ろう
B 認識・ 理解 レベル 2.5	☆ものじりになった と思う位は、S ☆新聞で差別のこ とを知った C ☆差別の理由には法 律的な理由は、C ☆朝鮮の人の話を聞 いてよくは、S	☆知らなかったこと を知れた、FC ☆人間が動物を傷つ けたい、初めは、K	☆平和にしないとい けないとわかつ、U ☆公園の古墳はすご くあらされて、M ☆よくわかつ、M
A 情動・ 価値観 レベル 1.8	☆学校へ入らな い、S ☆差別の理由は、S ☆平和になるには協 力と時間、S ☆平和の見方がよい 方に変わった、S ☆差別、差別、C		☆いじめの話、U ☆核のことで怖い、U ☆ゴミで取らな いよう、U ☆これからは地球を 守って行きたい、S ☆歴史、公園、U ☆植民地、新聞や紙 芝居を作った、M ☆公園に行き、M
C 行動 レベル 2.6	☆ポスター・新聞を 作った、IO ☆朝鮮の人は、IO ☆朝鮮の人の歴史、C ☆新聞・ポスターに まとめた、C ☆朝鮮の人に会って みたい、S	☆環境が汚れないよ う案をつける、K ☆環境が汚れない、他 のにも書いて、K	☆レポートを作った、M

縦軸には、国際性の3つの柱A・B・Cを中心とした分類項目をとり、横軸には、各児童が選んだ課題をまとめた折のテーマ名をとった。

考察の結果、次のようなことがわかった。

◇柱C（行動レベル）については、日朝・日韓グループと藤の本古墳石室のグループが多い。特に前者は、半年にわたる積み上げの成果によるものと思われる。

◇有能感や将来への意欲（四角囲いで示した）にふれた児童と、実際の行動の様子やまとめられた表現作品などとの関連を見ると、相関がある。「有能感」「意欲」はやはり教育活動上の大切なキーワードである。

◇D（課題学習への取り組み）やE（全体を通して）の中の感想からわかるように、新聞記事集めの継続的活動は、課題を捜し出す上で有効であった。また、相談できる先生が多数入る授業形態は好評であった。学年内の協力やT・Tの活用、あるいは、中学校区内での交流などにより、更に推進したいものである。

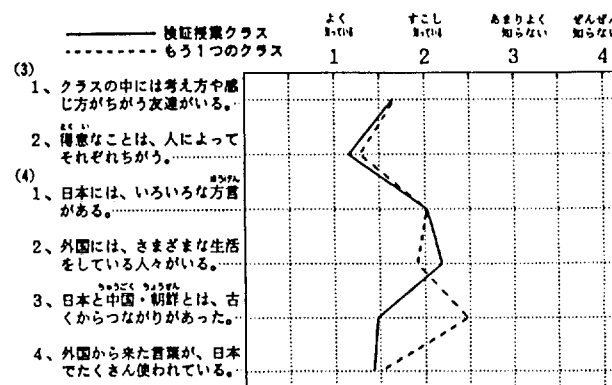
◇グループ別に分析する方法には限界がある。今後は、個々の反応を大事にした授業分析を進めていきたい。

⑤ 国際性グラフから

「東アジアの国々・地域への認識を高めたい！平和・友好の気持ちを育てたい！」（B-1・2およびA-3に関連）との願いで、継続的に国際理解教育の実践に取り組んで来たわけであるが、9月と1月に実施した意識調査を比べると、「韓国・朝鮮についてもっと知りたい。行ってみよう」との回答が、1月は大幅に増えた。

また、国際性グラフで見ると、中核目標「B-2 異文化理解」の平均値が著しく高く、1.66もあった。これは、中学校の全平均値1.75より高いのである。

そこで、更にその目標B-2についての設問を項目別に詳しく見ると、次のようになった。



4番の「日本と中国・朝鮮とは、古くからつながりがあった」について、31名中19名がよく知っているというのは注目し値しよう。東アジア諸国との友好関係を意識した継続的な取り組みの成果が明確に出ている。

4. 平成8年度 検証授業の内容と考察

(1) 検証授業に取り組むにあたって

方針1 コミュニケーション能力の育成に焦点をあてる。

方針2 検証授業クラスを1学級にしぼる。

研究の仮説②「国際理解教育の目標を意識した授業を意図的・継続的に積み重ねることによって、児童生徒の変容やその効果を具体的に示すことができるだろう」にせまるために、上記の方針をたてた。その理由と、平成8年度の研究の進め方の全体構想を詳しく説明する。

① なぜ、コミュニケーション能力の育成なのか？

すでに国際理解教育目標構造図で説明した通り、本研究会議の考える国際理解教育目標は広く、多面的な能力・資質を含んでいる。B-3 相互依存関係理解、A-2 人権・生命の尊重といった中核になる目標だけでも、合計9つある。その中から、C-2 コミュニケーション能力を選んだのは、次のような理由による。

ア、昨年度の実態調査の結果から、相互関係に焦点をあてた研究・実践の必要性を感じた。〈本論P137〉イ、広く日本の子どもの様子を見ても、細切れな生活時間、遊び時間の減少などの現状があり¹⁾、自分と他者とのかかわりの質が問われている。

ウ、「日本人にはどのような国際的資質が求められているか」という調査²⁾で、コミュニケーション能力は20項目中の上位8項目に入る。異文化生活体験者の場合には、第2番目にあげられている。

② コミュニケーション能力をどうとらえたか？

自分と他者とのやりとりがコミュニケーションである。従って、コミュニケーション能力には、自分が発信する面と、他者から受けとる面とがある。

本研究会議では、前者から次の3つの能力を考えた。

- 自分の意見を言葉で表現する。
- 自分の感じ方や考え方を絵や作文で表現する。
- 自分の伝えたいことを身振りや手振りで表現する。

また、後者から次の2つの能力を考えた。

- 人の話を静かに聞く。
- 相手の気持ちや感じ方を受けとめる。

さらに、前者と後者をつなぐものも考えた。

- いろいろなタイプの友達とかかわりが持てる。
- 多様な人と交流できる。

なお、外国語力は、言葉で表現することの関連・発展として、C-2 自己表現力・行動力の中に入れて考えることにした。

③ なぜ、検証授業クラスを1学級にしぼるのか？

国際理解教育の効果は、目標が広いせいもあって、短期間（一授業・一単元）ではとらえにくく、むしろ継続的な積み重ねによってはじめてはっきりと表れるということ、これまでの本市の研究などから経験的に知ることができる。

その点、昨年度の検証授業では、個々の授業による児童生徒の様子はとらえられたものの、これが国際理解教育の成果だとはっきり打ち出すには至らなかった。

そこで、今年度は思い切って検証授業クラスをD小学校の5年生1学級にしぼり、3回の検証授業を通した中長期的な児童の変容を追うことにした。これは、小・中学校のそれぞれに属するメンバーの両者が見とりやすい学年であること、地理的に集まりやすい場所であること、などの理由から決めた。

さらに、研究会議のチームワークを活用して、授業づくりや指導に際しては、次のような試みもした。

子どもたちがいろいろな人と交流するねらいも兼ねて、担任以外の者も積極的に授業者となる。

結局、検証授業⑤⑥では、A中学校とC中学校の教師がそれぞれの主たる指導者となり、担任は進め方等でアドバイスをするという、T・T方式の授業を行った。

また、検証授業⑦では、担任が中心的に進行する一方で、他の4人の教師は導入時に番を持つという展開の授業づくりを工夫した。

④ コミュニケーション能力育成のための研究構想図

以上述べたようなことをもとに、育成したいC-3 コミュニケーション能力と他の国際理解教育目標との関連などを、構想図に示した。 <次頁参照>

コミュニケーション能力は独立してあるのではなく、C-2 自己表現力・行動力やA-1 協力・協調の重要性、さらにはA-2 人権・生命の尊重と深く関連していることなどに注意してほしい。

また、具体的な検証授業の題材名と、その授業で設定した活動の場の流れなどを下側に示した。細かなステップを積み重ねる必要感から、工夫したものである。

¹⁾千石 保・飯長喜一郎著

「国際比較でみる 日本の小学生」

NHKブックス 1989年 P.103

²⁾研究代表者 中西 晃 「日本の児童・生徒の国際的資質・能力の育成に関する基礎的研究」

東京学芸大学海外子女教育センター 1990年 P.137

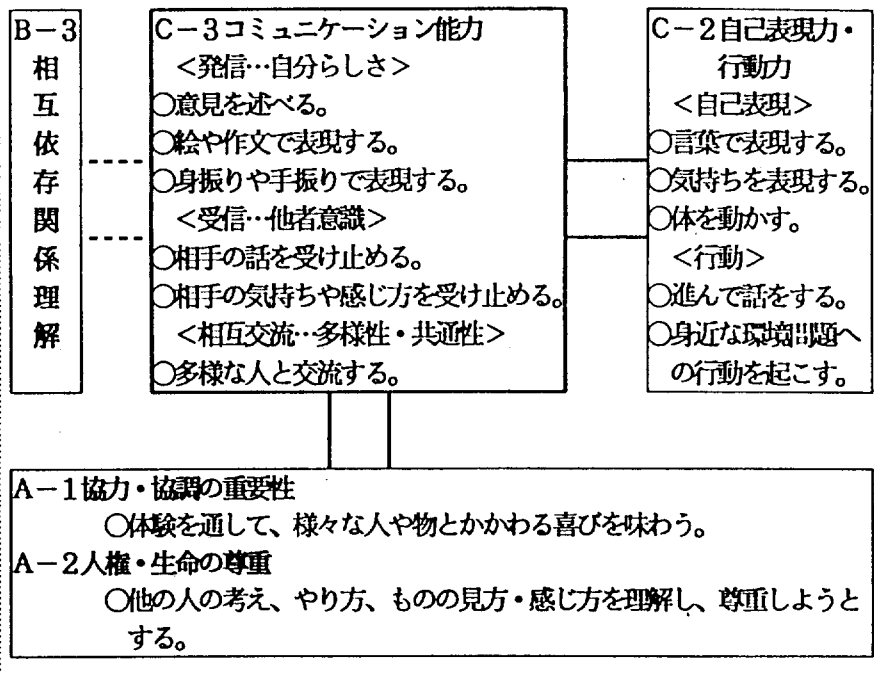
コミュニケーション能力育成のための研究構想図

<※B-3、C-3などの中核目標の詳細については、P.136目標構造図参照>

なぜ、
コミュニケーション能力の
育成なのか

- 実態調査の結果 <P.137参照>
 - B-3相互依存関係理解
 - C-3コミュニケーション能力 } 平均値が大きく落ちている。
- 日本の子どもの現実
細切れな生活時間、遊び時間の減少、稀薄な人間関係…
- 日本人に強く求められる国際的資質の1つ

コミュニケーション能力を
どうとらえたか



コミュニケーション能力を
高めるために

《検証授業の構想》 ※ 検証授業クラスは1学級に！
 ※ ステップを踏んだ活動の場を、意図的に！継続的に！

<時期>	5月 検証授業⑤	7月 検証授業⑥	9月 検証授業⑦
<教科>	図工科 F及びE教諭指導	算数科 G及びE教諭指導	国語科 E教諭他4名指導
<単元名>	「大きなお面をみんなでつくろう」	「図形のしきつめ」	「みんなで地球のことを考えよう」
<主な活動>	◇それぞれのよいところを1つは入れて、5人グループで共同制作する。	◇2人組でアイデアを出し合って、四角形の色板を操作する。	◇ゴミの問題解決のための自分の考えを、1対1の対話を繰り返して交流する。
<場の設定>	◆1つの目標に向けて、複数で活動する場の設定。 ◆最後は全体で作品を見合う	◆1つの目標に向けて、2人で活動する場の設定。 ◆最後は全体でやり方を交流	◆1対1で向かい合い、自分の力で活動する場の設定。 ◆最後は全体で感想を交流。
<主な目標>	☆絵で表現する。 ☆それぞれのよい点を出し合い、考えを受け止める。 ☆グループ内の協力・協調。	☆操作活動をする。 ☆お互いの考えの違いや共通性に気付く。 ☆考え方の多様性の尊重。	☆考えをはっきり伝える。 ☆じっくり話を聞き、相手の考え方などを受け止める。 ☆考え方の多様性の尊重。

(2) 検証授業⑤・⑥・⑦の実際

～どんな授業を積み重ねたのか～

- ① それぞれのよいところを1つは入れて、大きなお面を作ろう！

[検証授業⑤ 図工科 5月]

～5人グループによる共同制作～

クラス編成替えをしたばかりの5年生である。人間関係に不安を感じる児童も少なくない。授業でコミュニケーションを図るとすると、児童にとって抵抗感の少ない教科がよかろう、ということで図工科を選び、上記のような場を設定した。なお、T・T方式をとり、その主たる指導者としては、A中学校美術科のF教諭があたった。

畳2枚分もの大きさになる巨大なお面を作るわけであるから、A-1協力が不可欠ということが感覚的にもとらえられる。

さらに、個々人のラフスケッチを生かしながら、班のお面のイメージを決める活動(第2次)では、「それぞれのよいところを1つは入れよう」と強く働きかけたので、グループの友達の感性を認め、そのよさを感じとるC-3コミュニケーション能力の育成の場が、自然のうちに作られることになる。

要するに、グループの1つの目標に向かって一丸となって取り組ませながら、コミュニケーション能力の育成を図ろうとしたわけである。

- ② 2人組で相談して、いろいろなしきつめ方を考えよう！

[検証授業⑥ 算数科 7月]

～2人組で四角形を操作する活動～

こちらもT・T方式の授業である。主たる指導者としてはC中学校数学科のG先生があたり、担任のE先生は指名などの順序をG先生にアドバイスする程度にした。

算数科に対するクラスの児童の印象は、やや苦手という児童が思いのほか多い。そこで、児童がわりあい親しみやすい「図形」領域で、操作活動の多い題材を選ぶことにした。

C-3コミュニケーション能力の育成にあたっては、2人組(主に男子1名・女子1名)での相談活動に時間を多くかけ、図形の操作活動を通じて、一番身近な隣の人と自然にかかわれるような場の設定をした。また、教具については授業者が開発・自作したカラーボール紙を用意し、できるだけ多様な考え方が出るようにした。

さらに、本時の終末部では「どのようにしきつめたか」についてクラス全体で紹介し合う場も設けた。

- ③ 1対1で、ゴミ問題の解決方法についての考えを交流しよう！

[検証授業⑦ 国語科 9月]

～考え方の違う友達と1対1で対話する～

ある1つのテーマについて話し合った時、さまざまに意見が分かれることがある。そうした場合に、集団の中での話し合いはあっても、1対1でじっくり対話することは案外少ない。ましてや、意見の違う他の人と対話を繰り返すというような体験は、ほとんどない。

ところが、本研究会議のメンバーの1人が、1対1で考え方の違う人と対話を繰り返すという方法を、ユニセフの研修会で実際に体験した。そして、「なるほど、あの人はこういうことを考えていたのか」「こういう考え方もあるんだ」というような認識に至り、人の考え方や感じ方の多様性や共通性が実感できたと言う。

そこで、本研究会議の授業でも、ぜひこのコミュニケーションの方法を取り入れ、友達の考え方や感じ方の多様性や共通性について改めて気づかせることができないものかと考えて、本単元の授業を組み立てた。

本時は、国語科の説明文教材「一秒が一年をこわす」を扱った単元の導入の時間である。ゴミ問題解決の方法を選択した後、違う選択をした異なる考え方の人と“1対1で目を合わせて対話する”という活動を、相手を変えながら4度繰り返した。そして、本時の終末部で感想を交流し合った。

5月、7月の検証授業⑤⑥が、ある1つの目標に向かってお互いにコミュニケーションを取り合いながら協力・協調していく活動であるのに対して、この9月の検証授業⑦は、相手が1人だとは言え、全く友達に頼らずに自分の考えを明示しなければならない点で、かなりステップの上だった場の設定だと言える。

(3) 検証の方法

～どんな方法で児童の変容や国際理解教育の効果を見とろうとしたか～

本論の135ページで述べた3つの方法について、さらに詳しく述べる。

① 授業後のアンケート分析(対象:クラス児童全員)

授業の目標や活動内容にそったアンケートを授業後に行った。例えば、「楽しかったことやおもしろかったこと」「〇〇の活動をして気がついたこと」などを尋ねた。

毎回似たような形式で実施し、その記述内容を出席番号順に整理して並べた。そして、どの内容項目(目標)にふれられたものかを分類し、一覧表に○印で示して、個人並びにクラス全体の様子が検証できるようにした。

② 抽出児童の記録分析 (対象：男子2名、女子2名)

授業中の児童の言動・表情など(特に、他者とのやりとりの部分)を、授業の流れにそって詳しく記録し、前述のアンケートや後述の実態調査票との関連を見ながら、立体的・具体的に分析したいと考えた。

次のような観点についての意識調査から、対象児童は4人(I男、J子、K子、L男)に絞った。

観点	抽出児	I男	J子	K子	L男
話し合いや発言について	◎	×	△	△	△
友達とのかかわり方について	△	△	○	◎	◎
算数や図工の得意性について	◎△	×△	△◎	○○	○○

(◎いつもする・大好き ×ほとんどしない・大きい)

なお、対象児童の詳しい様子については、次項目(検証の結果)で述べるが、できるだけタイプの違う児童を選んで追跡するようにした。

③ 2回の実態調査に基づく国際性グラフの比較

5月から9月にかけて継続的に国際理解教育の授業実践に取り組んだのと合わせて、5月と9月にそれぞれ実態調査(本論P.137で詳述)を行い、その変化を検証授業とのからみで分析することにした。

ただし、5ヶ月の隔たりがあるとはいえ、途中で夏季休業が入るなどの状況があるため、今後も意識的に実践を続け、できれば年度末に再度調査して、学年当初と比べてみたいと考えている。

(4) 検証の結果と考察

① クラス全体の変化と考察

まず、授業後のアンケートから、コミュニケーション能力と関連する目標にかかわる記述が、どの程度見られるかを調べてみた。

次表は、それぞれの目標について、31名のクラスの児童のうちの何人がアンケートでふれていたかを、単純に集計したものである。(＊印は、該当数なしの意味)

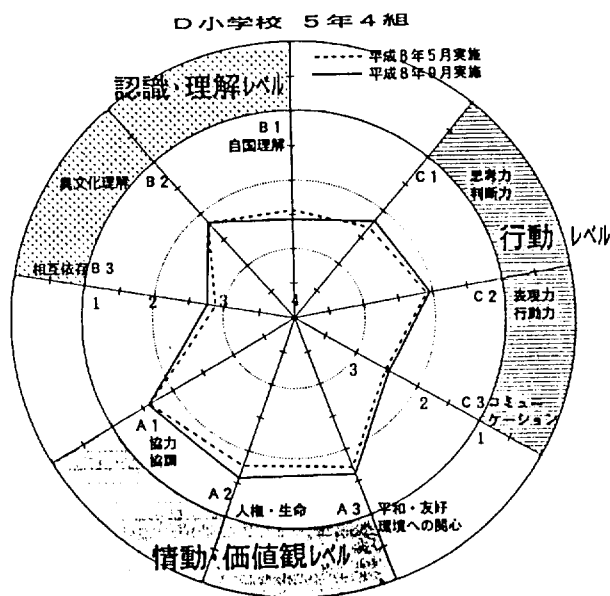
目標項目内容	検証授業⑤	検証授業⑥	検証授業⑦
A-1 協力・協調	問5… 15	問4… 15	*
A-2 多様性の尊重	*	問5… 22	問5・6… 17
C-2 作品	問5… 25	*	*
説明の仕方	*	問5… 5	*
C-3 他者意識	問5… 15	*	*
相手の考え	*	問4… 19	*
友達の聞き方	*	*	問4… 8
自分の話し方	*	*	問4… 16
納得(自分の聞き方)	*	*	問5… 15
友達の話し方	*	*	問5… 10
合計延べ人数	55	61	66
上記について、なし	2	1	0

この表から、次のようなことが読み取れる。

◆各目標内容項目に対して、ほとんどの児童がふれている。しかも、回を追う毎に延べ人数が増え、意識の高まりが見られる。授業効果があったと言える。

◆C-3コミュニケーション能力とC-2自己表現力・行動力が不可分の関係にあることは予想通りであったが、A-1やA-2とも深い関係があることが分かった。

次に、学級全体の国際性グラフの変化を調べてみた。



もっと大きな変化を想定していたが、実際のところはそれほど変化していない。そこで、詳しく見ていくと、次のようなことが言えよう。

◆プラス方向にわりあい大きく変化したのは、A-2 人権・生命の尊重(0.18ポイント…おおよそ、5人のうち1人が1ランク上がった程度)である。育成を目指したコミュニケーション能力の基盤になるものが上昇したので、評価できよう。

◆それに続いて、0.13ポイント上がったのは、C-1 思考力・判断力及びB-3 相互依存関係理解である。

◆C-3 コミュニケーション能力がプラス0.06、C-2 自己表現力・行動力がプラス0.05、A-1 協力・協調の重要性がプラス0.04と、一応プラスとは言え、あまり大きい変化ではない。

以上の結果から、クラス全体の国際性グラフでは、授業後のアンケートとは違って、コミュニケーション能力に関して顕著な向上が出ているとは言い難い。

では、抽出した個人の変容は、どうであろうか。

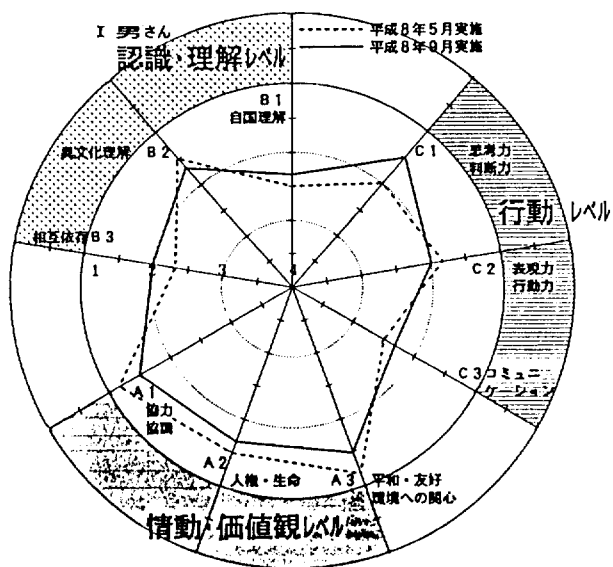
② 抽出児童の変容と考察

それぞれの児童について、プロフィール・国際性グラフ・アンケート・授業記録などから分析していく。

ア、I男 <プロフィール>

- ・友達とおしゃべりするのは好き。
- ・授業中いつも手を挙げて発言している。
- ・教科では、算数はとても好きだが、図工は少し嫌い。
- ・困っている友達と、あまり積極的にはかかわらない。

[国際性グラフの変化]



I男はC-3コミュニケーション能力がプラスに変化した。ただし、グラフ全体を見ると、目標によってプラス方向やマイナス方向に動いて、交錯した形になっている。しかし、9月の全体の形はバランスがとれている。

C-3の基盤と考えられるA-1やA-2は、若干マイナスとなってしまっている。

[検証授業での様子]

Aの柱に関する記述をアンケートから探してみると、検証授業⑤にはないが、検証授業⑥ではA-1に関連して「話したりして、考えがまとまった」とあり、さらに検証授業⑦ではA-2に関連して「いろんな考え方があると思った」と回答している。

また授業記録によると、例えば検証授業⑥では「反対ならどうかな」「台形を先にやってみよう」とペアの相手に促しており、協力・協調の姿勢がはっきり出ている。

C-3に関しては、挙手して発言する姿勢が検証授業⑥や⑦から見受けられた。特に検証授業⑦では、感想交流で「有料化とか会社の責任とか生活様式とか聞いていると、みんな再利用にいく」との発言をした。

[総合的な考察]

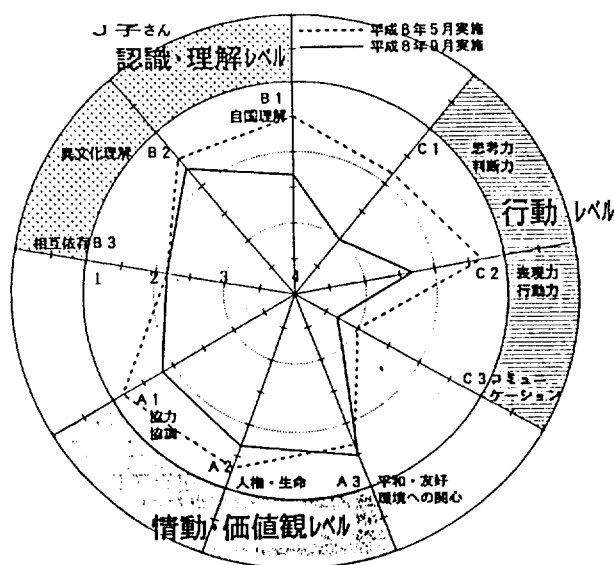
マイペース型で、一人でも課題を進めていけるタイプのI男である。したがって、C-1が伸び、クラスの友達と必然的にかかわりをもたないといけない場を設定したことによって、C-3も若干向上していると言える。

Aの目標の値が少しずつ下がっているが、授業での様子では協調性があるし、9月の国際性グラフが大きくてバランスもよいので、このまま見守って行きたい。

イ、J子 <プロフィール>

- ・友達とおしゃべりするのは好き。
- ・授業中手を挙げて発言することはほとんどない。
- ・教科では、算数はとても嫌いで、図工も少し嫌い。
- ・困っている友達などは、あまりかかわらない。

[国際性グラフの変化]



J子は、A-3を除くほとんどすべての目標がマイナス方向に動いている。Cの柱の下がり方が大きくて、C-1とC-2についてはそれぞれ1.17及び1.0ポイント分、大きく下がってしまった。C-3はマイナス0.33ポイントである。

[検証授業での様子]

アンケートの記述を順に追って見ていくと、検証授業⑤では「わたしたちEグループのお面をよく見ると、おにみたいでした。でもうまくできました」と、仕上がった作品についての記述(関連目標C-2)のみであった。

しかし、検証授業⑥になると、「(2人組の時) アイデアを出してくれたのでうまく作れた」とか、友達の発表に対して「ほとんど同じ説明でした」など、他者と自分を意識した記述がある。さらに、検証授業⑦では、C

ー3にかかわる記述がたくさんあって、例えば、“その他”の項目に「いつも人前ではうまく話せないけど、1対1だと自分の言いたい事が全部話せた」とあり、ステップを踏んだ場の設定によって、徐々に自信がついて来たように見える。

しかし、検証授業⑦では、授業記録によれば「やっと意見をお互いに言える。相手の意見にうなづく。後は関係のない話を二人でしている」という状況であった。

[聞き取り調査]

国際性グラフでは大きくマイナス、授業後の感想ではプラス、授業記録からはややマイナスとの評価が出て、つじつまが合わなくなってしまった。そこで、J子の内面を探るべく、簡単ではあるが聞き取り調査を行った。

その要点をメモ風に再現すると、次のようになる。

T：いろいろな先生の授業、どうでしたか？

C：楽しかったです。

T：何か、印象に残ったことなどありますか？

C：図工のお面の色ぬりや切るのが楽しくできて、色ぬりの時けんかするかと思ったけど、楽しくできてよかったです。

T：話すことや聞くことに自信が持てましたか？

C：前は恥ずかしくてあまり話せなかったけど、ゴミの授業のあと自信をもてました。

(中略)

T：「初めてあった人と進んで話をする」(C-2)が(1から)3になっていますが、どうですか。

C：初めは話しにくいけど、慣れてくると好みやタイプがわかるから、話しやすいです。

T：今みたいに「自分の気持ちを相手に表す」(C-2)が、全然できないになっていますが。

C：仲のいい友達とは素直に表現できるけど、そうでない人とは表現するのが難しい。

T：最近の気持ちや考えていることを教えて下さい。

C：友達と仲良くなれたし、友達のいいところがわかったから、1学期より友達と仲良くできる。

T：友達と仲良くする時、気を付けていることは？

C：友達の気にしているところを言わないで、いいところを言ってあげる。

T：どうもありがとうございました。

[総合的な考察]

聞き取りから、J子が他者のことを強く意識していることがわかる。漠然と回答していた5月の段階から、他者を認める経験を積み重ねる中で、自分を冷静に見つめるようになり、9月の段階では慎重な回答をしたと考えられる。J子は大きな成長をとげているのである。

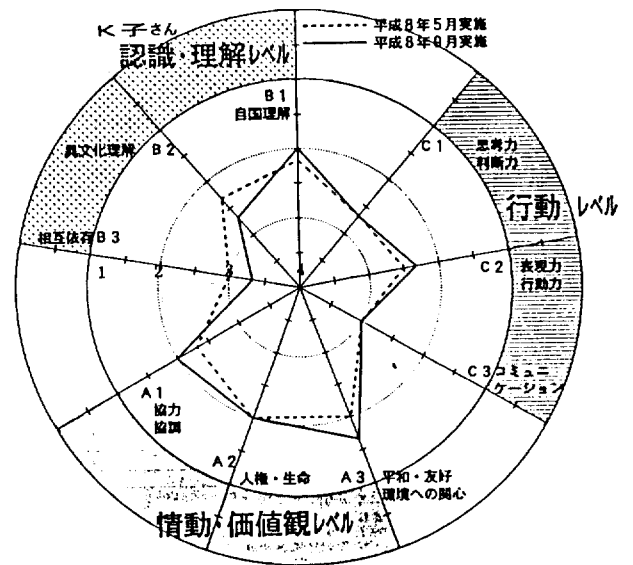
仲のよい悪いにあまり左右されずに自然な人間関係が築けるようになることが、J子にとっての今後の課題なのかも知れない。

この事例を通して、国際性グラフの限界を知って活用することの重要性を思い知らされると同時に、ちょっと気になる児童生徒については、個々の内面や発達状況を何らかの方法で探りながら、総合的に分析していく必要があることを強く感じた。

ウ、K子 <プロフィール>

- ・友達とおしゃべりするのは好き。
- ・授業中発言することはあまりない。
- ・教科では、図工はとても好き。算数は少し嫌い。
- ・友達を頼りにしている。

[国際性グラフの変化]



K子は、C-2がほんのわずか(0.17ポイント)だが、プラス方向に変化している。また、A-1とA-3も向上している。

[検証授業での様子]

授業記録を見ると、検証授業⑤では友達との自然な会話を楽しみながら後片付けをしており、またF先生の話を積極的に聞いていた。

検証授業⑥では、考えを紹介しあう場面でペアの男子と一緒に前に出て、自分達の考えた「たこ形のしきつめ」を黒板に掲示し、発表した。

また、検証授業⑦では次々と相手を見つけて、合計4人と対話をした。観察していると、聞く姿勢が大変よいことに感心させられる。話すことへの抵抗も、減ってきたように見える。

アンケートの方では、検証授業⑤で「仲のいい友達と離れてしまって心配だったけど、お面を作っているうちに一緒にいろいろできた。今度は自分から一緒に自分できらうかな」と、他者意識をのぞかせた。検証授業⑦では、「どうしてみんなすらすら言えるのかな」と、素直に相手を認めている。

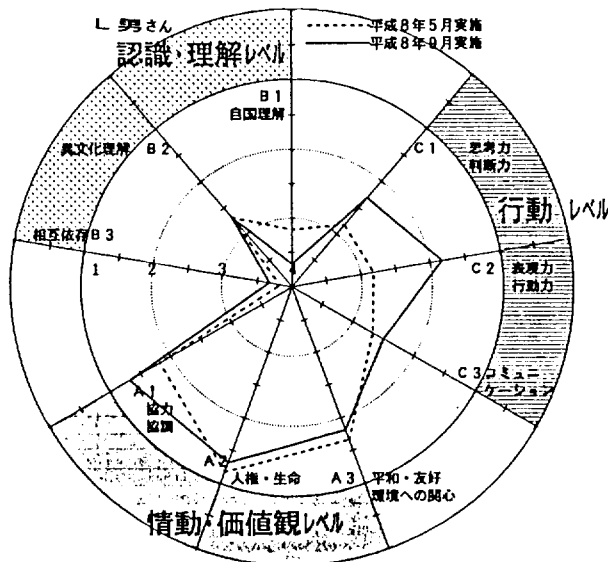
[総合的な考察]

一見とても内気に見えたK子であったが、5月から意欲的で、素直にさまざまな刺激を吸収している。もうしばらく継続的に実践を積み重ねることによって、C-3 についても自信がついてくるものと期待している。

エ、L男 <プロフィール>

- ・友達とおしゃべりするのは好き。
- ・授業中、手を挙げて発言することはあまりない。
- ・教科では、図工も算数も少し好き。
- ・困った友達などのことが、気になる。

[国際性グラフの変化]



Cの柱が大きくなった。特に、C-1 (0.5ポイント)とC-2 (1.0ポイント)の伸びは大きい。一方柱Bについては極端に小さい。この点は、認識・理解面での個人的な支援が必要だと考えている。

[検証授業での様子]

3回の検証授業後のアンケートを通して見ると、回を追うにしたがって記述の量が増えている。質的にも向上している。例えば、検証授業⑦の「恥ずかしそうに言っている人と、恥ずかしがらないで言っている人がいた」というのは、L男ならではのA-2多様性の尊重の表現であろう。

授業記録からは、自然に友達と交流し、会話している姿が随所に見られたことがわかった。

[総合的な考察]

以上から、L男は、コミュニケーションのステップを踏んだ今回の取り組みになじみ、素直に自分が出せていることがわかる。

今後は、全体の前でも発言するという面や、冒頭述べた認識・理解面での支援が課題になろう。

③ クラス全体の変化の再考察

抽出児童の分析を通して、児童それぞれの変化が一樣ではないことに改めて気付かされた。さらに4人のグラフを比べると、5月と9月の国際性グラフが交錯する型もあれば、ほとんどマイナスに動いている型もある。一概にクラス全体の平均値からの分析だけで片付けてしまってはならないと考えた。

そこで、全児童について個人別に5月と9月の国際性グラフを作成した結果、次のような変化の型と、それに該当する人数を把握することができた。

ア、国際性グラフの変化の型と人数

型	9つの中核目標の変化の様子	人数
++	すべてプラス方向もしくは変化なし	4名
+	マイナスは1つないし2つだけ	11名
±	プラスとマイナスとが交錯	5名
-	プラスは1つないし2つだけ	8名
--	すべてマイナス方向もしくは変化なし	2名

(計30名)

イ、C-3コミュニケーション能力の変化と人数

変化型	+0.5以上	+0.5未満	±0	-0.5未満	-0.5以上	合計
++	2	2	0	0	0	4
+	4	4	2	1	0	11
±	1	2	0	2	0	5
-	1	1	0	4	2	8
--	0	0	1	1	0	2
合計	8	9	3	8	2	30

以上アとイの結果から、次のようなことが言えよう。

- ◆アの型の分布を見ると、プラス方向に変化した目標の多い児童(++及び+)は15名である。マイナス方向に変化した目標の多い児童10名を上回る。
- ◆C-3についても、プラス方向に変化した児童が17名と多い。特に、0.5ポイント以上変化した児童が8名いたことは、授業実践の効果と評価できる。
- ◆抽出児童J子の考察で述べたように、内面や発達状況を探る必要のある児童の見通しがたった。
- ◆アの表とイの表とはかなり相関が高い。従って、今後もコミュニケーション能力の育成を継続したい。

IV まとめと今後の課題

(1) 実践への見通し (仮説①)

国際性の全体像をとらえる尺度として、実態調査票や国際性グラフはかなり有効であることがわかった。児童生徒の長期的変容を追って行く尺度としても活用できた。また、国際理解教育目標構造図は、小学校国際教育研究会の授業研究会で実際に使われ、授業実践や研究協議の際の指標となっている。したがって、これらを活用することにより実践への見通しは十分持てるはずである。

今後の課題や留意点を列挙すると、次のようになる。

- ◆開発した題材や工夫した教育方法をデータベース化して、各学校が日常的に活用しやすくする。
- ◆調査票やグラフの限界を知り、目の前にいる児童生徒一人一人の内面を知る努力をして、総合的に授業や児童生徒の姿を分析することが肝要である。

(2) 子どもの具体的変容や国際理解教育の効果 (仮説②)

一朝一夕では育ちが見にくい国際性であるが、2年目は検証授業クラスを1つに絞り、継続的に実践してきたので、国際理解教育の効果が具体的に見えた。

そして、育てたい中核目標にそって、ステップを踏まえた授業(ある時は教科・領域の枠を越えて)を続けることの大切さ、個に応じて児童生徒の変容を総合的にしかも粘り強く追究することの重要性を、思い知らされた次第である。

具体的には、C-3 コミュニケーション能力の育成に焦点をあてた研究をした結果、その基盤がA-1 協力・協調の重要性及びA-2 人権・生命の尊重にあることや、コミュニケーション能力の成長過程には自分を見つけることもあるのではないか、という点にも気付いた。

今後の課題や留意点をあげると、次の通りである。

- ◆各学校の実態に応じて目標をある程度絞り、継続的に、かつ柔軟に(例えば、T・Tの活用…など)実践するという方法を、できるだけ広める。
- ◆目標を絞った時、関連する目標や児童生徒の予想していない動きを見落とさないようにする。
- ◆クロス・カリキュラムの視点を生かした、総合的な学習単元の開発を試みる。そのために、国際理解教育研究委嘱校や自主研究校ともできる限り連携を図る。

おわりに

国際理解教育の研究を通して様々な方法に挑戦し、柔軟な発想の大切さを改めて思い知らされた。そして、小・中学校の研究協議の仲間が1つの授業を一緒に創り出すことによって、お互いの違いや共通性を体感できた。

この貴重な経験を今後には生かしていきたいと思う。

検証授業クラスを1つに絞った関係で、D小学校には何度も研究会議の場を提供していただき、教職員の方々に多大なお世話になった。ここに厚く御礼申し上げる。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、貴重なご指導・ご示唆をいただいた多数の先生方に、心より感謝申し上げます次第である。

・参考文献

- 馬島啓吉他「海外帰国子女の教育相談に関する研究
～児童・生徒の国際性と意識調査～」
川崎市総合教育センター研究紀要 1984・85年
- 深谷和子他「モノグラフ・小学生ナウvol. 9-4 国際理解」
福武書店教育研究所 1989年
- 中西 晃他「日本の児童・生徒の国際的資質・能力に関する基礎的研究」
東京学芸大学海外子女教育センター 1990年
- 梶田 毅一編著「小学校新しい授業づくりと形成的評価」
東京書籍 1990年
- 若松栄司他「児童・生徒の国際性の育成に関する研究
～国際理解教育実践に向けてのアプローチⅡ」
川崎市総合教育センター研究紀要 1991・92年
- 佐藤郡衛他「帰国子女の特性把握とその評価基準の開発に関する実践的研究」
東京学芸大学海外子女教育センター 1993年
- 「心の国際化をめざす学習指導と評価」
名古屋市教育センター研究報告5-05 1994年
- 名古屋市教育センター研究報告6-05 1995年
- 岡田雄志他「国際性に関するアンケート 試案」
名古屋市教育センター 1995年
- 高橋 豊他「国際理解教育の本」
川崎市総合教育センター 1995年

・指導助言者

- 東京学芸大学教授 佐藤 郡衛
(川崎市総合教育センター専門員)
- 川崎市立小学校国際教育研究会会長 馬島 啓吉
(川崎市立荏宿小学校長)
- 川崎市立小学校国際教育研究会副会長 渡辺 誠一
(川崎市立河原町小学校長)
- 川崎市立小学校国際教育研究会副会長 飯塚東洋雄
(川崎市立南菅小学校長)
- 川崎市立中学校教育研究会帰国生徒教育部会会長
(川崎市立宮前平中学校長) 米倉 宏
- 川崎市立中学校教育研究会英語教育部会会長
(川崎市立南大師中学校長) 菊池 武熙